
絶望の階段

鏡一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望の階段

【著者名】

鏡一郎

N2535D

【あらすじ】

ひとりの男の波乱万丈の人生の物語

第一章 分かれ道

（第一章 分かれ道）

人は多かれ少なかれ「欲」を持っている

僕は、金持ちになりたい！ 輝かしい人生を送りたい！ と

願つてはいたが、当時の僕は何も無かつた・・・

金は無い、仕事は無い、借金もある、そして住む所すらまらない

そんな僕が、どうやって金持ちになり輝かしい人生などあふれるのか・・・

まるで、無いものねだりの夢だけを見ている人生の落伍者だった。

しかしそんな僕に、転機と言えるかはわからないが

ひとつのかぎかけが訪れた。

それは、仕事もしない僕は家を追い出されてしまい

ついに住む所も無くなってしまった。

今までの生活を振り返るとこうなってしまったのも

当然の結果だった・・・

困った僕は、取り合えず住む所と生活費を確保する為に、

無料の求人誌を手に取った。

その中には、即採用・寮完備のあるものは

パチンコ店やキャバクラ店などがあった・・・

朝の弱い僕は、キャバクラ店を選び電話をし面接に向かった。

面接に行くと僕よりひとつ年上の店長と面接をして

採用が決まり、翌日から働くことになった。

正直、僕の心の中では「キャバクラ」という仕事を

凄く馬鹿にしていて、何か自分自身に情けなさを感じていた。

そして、この時に出会った店長をしていた男が

後に僕の人生に大きく関わっていく事を

この時には、まだ夢にも思っていなかったし、

最後の結末もまったく想像する事はできなかつた・・・

（第一章 完）

第一章 ポーイ編

キヤバクラでの仕事生活が始まった。

久々の仕事、しかも始めての夜の世界だったので

期待と不安が入り混じりながら少しだけ胸が躍っていた。

僕が最初にやらされた仕事は、

前日に酔っ払った奴がいたのか、嘔吐物まみれのトイレの清掃だった。

かなりの悪臭が漂っていて、屈辱的だった・・・

しかし、それを綺麗に掃除するのが僕に課せられた仕事だった。

周りを見渡すと、僕より年下のくそ生意気な同じ店の従業員（先輩）達が

おしゃべりしながら店内で遊んでいる姿をじり目で

今の自分の立場を再認識させられた。

僕は、いつか奴らを追い抜き

下つ端から脱出する事を心に誓い無我夢中で掃除をした。

そして開店準備が終わりいよいよ営業時間が開始した。

僕の仕事はボーアだつた。

ボーアの主な仕事は、灰皿の交換、アイス（氷）の交換、ミネラルウォーターの交換と客席の後片付けや客席のセッティングだった。

これが、思つていたより大変な仕事だつた。

照明の薄暗い店内の中、キャストに呼ばれる前に

氣を利かせ全ての交換をしなければならなく最初のつまは遅いとしづし怒られてしまつ事もあつた・・・

座る時間はもうひとつなく、営業中の休憩時間もないままあつといつ間に営業時間が終了し、

簡単な片付けを済ませ、

午前3時くらいにやつと社員寮に戻れた。

馬鹿にしていたはずのキャバクラの仕事だつたはずなのに、

僕は疲れきっていた・・・。

翌日は午後3時に出勤の為、簡単な食事を済ませ

午前5時には布団に入ったんだが眠たいのに全然眠れなかつた。

休憩時間も無い立ち仕事の為、足のふくろひざがパンパンに膨れ上がり

痛くて眠れなかつた。

そんな生活を繰り返し1週間が過ぎ

気がついた時には、僕の体重は10キロ減つていた・・・

ようやくボーイの仕事にも慣れ、入社から3ヶ月が過ぎた頃
僕は部長に呼ばれた。

部長が僕に言つてきた事は、とても意外な事だった。

「今日からはマネージャーとしてキャストの管理も任せせる。」と言
われた。

正直、僕は驚いた・・・

何故ならば、ボーイとマネージャーの間には

ボーイ 主任 サブマネージャー マネージャーと

2つの役職が存在するが、その2つの役職を飛び越え
マネージャーになったからだ。

しかし、驚きはあつたものの自分を評価してくれた事に

対して凄い喜びとする氣にとても満ちた。

マネージャーの主な仕事は、店長と二人三脚になり

キャストの管理をし、営業中はキャストをどの客席に着け

場を盛り上げお客様の延長を狙い売上を上げるかが仕事だった。

その為には、全てのキャストの性格を把握し、

そしていかに自分とキャストとの間に信頼関係が築けるかが

重要なポイントだった。

キャストの性格を把握するのには、そう時間はかからなかつたが、

信頼関係を築く事が、結構思つていたより大変だった。

何故ならば、僕も人の事を言えるほど立派な人間では

もちろんないが、その僕から見ても「適当だなこいつは」と

思われる子がほとんどだった・・・。

送迎で迎えに行く2時間くらい前には電話をかけ起こす

人間目覚まし時計なんかは当たり前で、プライベートなお金や男の問題も

相談に乗る事も多く、あげくには多重債務に陥つて悩んでいた子もいて

そんな時には、朝その子を迎えて行き所轄の裁判所へ連れて行き任意整理や特定調停の仕方等も一緒に聞きに行つたこともあつた。

（当然、その分の給料などは発生するわけではなかつたが・・・。）

数多くの相談を受けた中でもとても印象深かつた事がひとつあつた。

それは、ひとりのキャストが営業が終わつても全然帰らうとせず

家に帰りたくないと泣いている・・・。

取り合えず、僕は彼女を車に乗せ家に送ることにした。

彼女に帰りたくない理由を尋ねると、

彼女は泣きながら小声で話し始めた。

そして彼女の口から驚くべき言葉がでてきた・・・。

その言葉とは、

「毎晩実の父親に近親相姦されるから家に帰りたくない」と言われた。

僕は自分の耳を一瞬疑つた・・・。

彼女は、まだ18歳で幼さが残る女の子だつた。

（

第三章

マネージャー編・前編

完

）

僕は一瞬頭が真っ白になってしまったが、
冷静になり彼女の話を聞くと

中学1年になつたくらいから、

父親に強要されそんな関係になり

母親にも相談したが、母親も父親の暴力が恐く

その事実を見てみないふりをし

彼女の助けにはなつてくれないみたいだ・・・

そして最近になり、弟を連れて母親は家を出て行つてしまつたとの
事だった・・・

とりあえず、その日は母親の住む家に彼女を送り届けた。

翌日になり部長に彼女の「事情」を話し、相談したのだが

やはりプライベートな問題で事が事だけに、かわいそつだがどうし

してあげられないと言われてしまつた・・・

当然と言えば当然の答えなんだが、

僕はそれでも思い切つて相談してくれた彼女を何とかしてあげたく

一緒に所轄の警察署へ相談に行き、

警察の方で彼女の父親と真相を聞き対応してくれた話しになつた。

最初はその父親が見た田もとても真面目田そつで

職業も公務員とことから、中々事実を認めず

警察や児童相談員の方などの懸命な説得もあり

ようやく事実を認め表面上だけなのかも

しれないが自分の過ちを認め改心してくれた・・・

その後、彼女もお店を辞め遠くの親戚の家にお世話になることになり

連絡をそれ以来とつてはいないが、きっと新しい地で彼女が

幸せな生活を送っている事を僕は願つた・・・。

） 第四章 マネージャー編・後編 完（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2535d/>

絶望の階段

2011年1月8日21時42分発行